

令和6年度第2回瀬戸市生活支援・介護予防サービス提供主体等協議体会議 議事録

開催日時	令和6年10月31日（木）午後2時から午後3時30分まで
参加者	委員：別紙委員名簿のとおり 事務局：高齢者福祉課長、専門員兼地域支援係長、担当主事
場所	やすらぎ会館 大集会室
内容	1 開会 - 事務局より本日の会議について説明 〈説明内容〉 協議体は瀬戸市全域での高齢福祉の課題を整理し、政策提言に繋げるための会議でもある。定期的な情報共有や連携の強化、課題解決のための取り組み検討等を目的とし設置された協議体である。第1回協議体では委員の皆様にご地域課題表ごとに議論していただいたものを基に今回「通いの場・外出機会の創出」「高齢者の見守り」をグループワークのテーマとさせていただいた。 2 議事 （1）福祉施策全体の現状とデータ共有 【瀬戸市の現況と高齢者事業の取組み】を基に事務局より読み上げ、説明 （2）グループ検討 - 事務局よりグループ検討について説明 〈説明内容〉 「通いの場、外出機会の創出」「高齢者の見守り」についてグループワークを行っていただく。「通いの場」について、高齢者を始めとした地域住民が主体となり、介護予防等を目的とした活動を行っていただく場である。また、住民同士のふれあいを通して生きがいづくりや仲間づくりの輪を広げ、地域の介護予防の拠点となる場でもある。厚生労働省は通いの場を介護予防のための重要施策として位置付けており、人口1万人当たり10ヶ所で開催することや令和7年度までに参加率を8%まで高めることを目標に掲げている。瀬戸市の人口は約12～13万人であるため、市内に通いの場は12～13ヶ所なければいけないが、現在は3ヶ所のみである。今後、通いの場を増やしていくためにどのようなことが必要かAグループにて話し合いを行っていただきたい。「高齢者の見守り」について、日ごろから顔を合わせている家族や近隣住民や友人に対して、声掛け等を行う日常的行為である。このような見守りを取り上げて意義や在り方の検討しながら見守りの仕組みを構築しなければいけないところまできている。見守りにも様々な種類があり、交流の中での緩やかな見守り、ICT技術を用いた見守り、支援者によるネットワーク形成、居場所による見守り等が挙げられる。どのような見守りがあれば良いか、どのような見守りができるかBグループにて話し合いを行っていただきたい。 ①Aグループ 〔第2層生活支援コーディネーターより説明〕

まず、個人で議題に沿って思いつくものを付箋1枚につき1つ書いて頂きたい。その後、皆さんで話し合い、その場で思いついたものがあれば付箋に書いて追加していただきたい。

〔瀬戸市社会福祉協議会より〕

楽しい場づくり。趣味を持つこと。麻雀、ゴルフ、食事。ラジオ体操、ウォーキング、カラオケ。声掛け、グループ作り。ラジオ体操をしても集まる人が固定されており、そこに新しく入っていく勇氣が必要。

〔委員長より〕

男性が参加しやすい活動や仕掛け。食事を作る。使える交通手段は何か一目で分かる広報等。近所同士で買い物に行く習慣をつける。高齢になり介護リスクが大きくなって困る人がいるため、まだ大丈夫のうち、健康なうちに人間関係を構築し高齢になる前に参加癖をつける。高齢者もスマートフォンを使う人が増加しているため、アプリを活用した運動習慣やネットワークを構築していく。立ち話できるスポットを道端につくる。高齢者福祉に役立つパンフレット等は市や包括等基本的な場所にはあるが、コンビニやスーパー等手に入りやすい場所に設置した方が良いのではないかと、子が知っていれば子から親に情報が伝わる。

〔瀬戸地域福祉を考える会まごころより〕

行きたい場所を選べる、活躍できる場づくり。目的地まで行く移動手段。ちょいソコやデマンドタクシー。行った場所で自己実現ができる様な生活スタイルの確立。行った先で役割がある。幅広い選択肢。移動販売の場がみんなの居場所になっている。新しい物事に取り組むと長生きできる。最初の一步を誰に踏ませるか、その勇氣が必要。新しい人が入っても快く受け入れる場の雰囲気。キーパーソン。プロボノに対して瀬戸の企業も取り組むべき。若い内からボランティアを行う、そこに馴染むと高齢になった時もその場に参加することができる。サロンが通いの場になっている。小学校の空き部屋の活用

〔第1層生活支援コーディネーターより〕

企業の送迎バスの活用。自分の得意が生かせる場づくり。その場で買い物ができる場所（移動販売）。定年退職の年齢が上がってきているからこそ、企業への働きかけをする必要がある。外出先のトイレ（介助用）がどこにあるか分かる地図があれば出かけやすくなるのではないかと。

〔第2層生活支援コーディネーターより〕

情報発信の方法について、どのような場所があるか、居場所づくりのチラシをコンビニ等に配布。早いうちに行けるようにする声掛けの必要性。声掛けについて、一緒に参加できるよう働きかけること、そこから仲良くなり一緒に買い物に行くといった付帯効果もある。地域の居場所が自己実現の場所になると生きがいやりがいに繋がる。移動手段について、送迎か企業連携か、目的地へのルートが分かるような情報収集。メニューを増やすことについて、豊富なメニューから選択できる、そこから自分の得意を活かせる。それを知るためには幅広い選択肢を持つことが重要

である。ICTを活用してスマホ教室等企業協力をしていただき、外出の環境作りが大切である。瀬戸市の周知や取り組み方法を検討することが大切である。

②Bグループ

〔第2層生活支援コーディネーターより説明〕

自身の思ったことや意見を付箋1枚につき1つ書いて頂きたい。それぞれの団体が現在していただいている活動も付箋に書いていただきたい。

〔地区社協会長連絡会より〕

毎週月曜日（月4回）サロンを実施しているが、そこで参加者の確認を実施している。そこで参加が確認できない時は、サロン責任者が心配なため連絡している。コロナ禍で集まらない時、手紙等を出しサポートしていた。災害時、要支援者の確認。井戸端会議ができる場所や体制づくり。前は銭湯がたくさんあり、近所の人が集まり話すことでどんな人がどこに住んでいるのか薄々分かっており、それがさらに繋がっていた。そういった場があれば良い。自治会に関して、若くて加入していない人をどう繋げるか。

〔基幹型地域包括支援センターより〕

自分の存在を知ってくれる人がいることが一番の安心に繋がる。自分の存在を知っている人が1人でも多くいるということは独居で倒れたとしてもすぐに見つけてもらえる。また早期発見に繋がるのではないかな。洗濯物や新聞、家の様子、ゴミ出し状況等を気にかけることで様々な気づきに繋がるのではないかな。少しずつみんながお節介になると状況も変化していくのではないかな。企業と相談機関の連携を図る。お店の常連さんでその人の様子がおかしいと感じた時、企業側はどこに連絡・相談したら良いのか分からないといったケースが多い。また、どのレベルで相談したら良いのかも不明瞭であるため、そういった連携もしていくべき。地域との関わりから、自治体に参加する人が減少傾向にあり、高齢者も役員ができないからと断ったり加入しなかったりしている。役員の負担軽減し、みんなが進んで役員をできるようになると良い。

〔瀬戸市シルバー人材センターより〕

回覧板に閲覧したかどうか名前を書いてもらっている。同じ欄に「元気・病気」等記入欄を設けるのはどうかと思うが、個人情報になってしまうことや書くことを拒否する人もいる。自治会未加入者は飛ばされてしまうため、回覧板が回らない人のためにもそういった欄を設け、回していただけたら状態等が分かるので良いのではないかな。また、新聞店の協力をもらう。話す場を設けるため、月に1度町内ブロック（10件程度）で掃除を実施している。

〔瀬戸市民生委員児童委員協議会より〕

民生委員として根本的に見守りが大切であり、それに加え自治体・公民館の運営の事柄にお節介でもいいので広報をしていくべき。会長として、町で会ったら見守りで十分と思っていたが、皆さんの話を聞いていたらこのままではいけないと感じ

た。お節介と言われるくらいに自宅訪問をし、連区や町内で事業があるから出席するように伝えるべきであると感じる。回覧板だけでは難しい。高齢者に外出してもらうためにも、高齢者がやりたいとを研究し、催しを提案したいと考える。男性が地域参加できる催しを検討すべき。

〔第2層生活支援コーディネーターより〕

外出先が見守りの場になっている。本人の抱える不安がある。居場所が見守りになる。企業との連携を図ることができるかと声掛けが行えるのではないかと。月1回の行事でも見守りに繋がっている。

(3) グループ発表と全体議論

①Aグループ〔瀬戸地域福祉を考える会まごころより発表〕

居場所づくりにおいて大切なことは一人一人が行きたい場所があること、そこで自己実現や自己発信できる場があると良い。

地域の居場所でやりがい・生きがいを感じる場があると良い。そのためには居場所のメニューを増やす。自分がやりたいことがある、行きたい場所があるということが大切である。現在、スマートフォンを使用している高齢者が増えているため、ICTの活用で企業とタイアップする。それが広まることで気軽に居場所に外出することができる。そこに行こうとしても移動手段がなく行けない人もいる。

自己実現の場所として、自分が主役になる、誰かに教えてあげられるそういった役割を持つことも大切。高齢になって何もできない、行きたいけど馴染みがないから行かないという人々を広い心で受け入れる場所も必要。

情報発信の仕方について、いつどこにバスが出ているのか等コンビニや街角に張り出す、いつでもどこでも分かる情報発信が重要である。行きたいけど行けないという問題を解消する。

地域のキーパーソンを見つけだし、その人に居場所の役割を担ってもらう。高齢になったら役割を持つことも大切である。

②Bグループ〔地区社協会長連絡会より発表〕

地域でできる見守りについて、町内会の必要性を知ってもらう。回覧板を利用し、安否確認のようなコメント欄を付け、回せば状態が分かるのではないかと。

本人の不安として、自分の存在を知ってもらえるのかという不安を払拭する必要がある。独居の人は、何かきっかけで自分を知ってもらいたいと思っていると考えするため、どうしたら知ってもらえるか、周囲が知っていれば本人も安心するのではないかと。

その他、地元企業との連携や活用をしていく。

〔基幹型地域包括支援センターより発表〕

本人が持っている不安を解消するために居場所や地域でできること、どのように見守りを続けていくかが課題である。

〔委員長より総括〕

本日はワークショップ形式に変更し、皆様のアイデアを出して語っていただいた。

普段の会議でも活発な意見が出るが、ブレインストーミングを行うことでさらに意見がでることは良かったのではないかと考える。本日のテーマについて、2グループ共通していることがあり、通いの場があれば見守りが必要な高齢者も外出することができ、見守りができる。素晴らしいアイデアを基にして具体的な政策実現に向け、今後の会議で詰めていきたい。本日のアイデアに関連して思いつくことがたくさんあるのではないかと。ぜひそれを記録に留めていただき、次回以降の会議で提案・意見をいただければと思う。

皆様の知恵をいただくことが必要であるため、今後ともお願い致します。本日の雰囲気でも次回も自由に発言できるようにしていきたい。

4 閉会